慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	恐慌と金本位制の危機
Sub Title	
Author	小高, 泰雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.11 (1932. 11) ,p.2324(110)- 2332(118)
JaLC DOI	10.14991/001.19321101-0110
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19321101-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

恐慌と金本位制の危機

小高泰雄

世界經濟恐慌が如何にして生じ來つたかと謂ふ問題に對して、種々なる解答が與へられるけれども、それ等の解答は大體に於いて二つに分類される。換言すれば二の立場からして、世界恐慌は批判されてゐる。一はそれが全く生產過程から、他はそれが流通手段たる金の需給關係から醸成されたと見做す。勿論この間に此等に兩過程起つた結果的事實を混合して、それを原因だと主張する多數の論者が介在してゐるが。流通過程に原因を見出す論者は、金本位制の動搖と恐慌を結び附ける。そして金本位制はそれ自體として新なる救濟の道を開き得るものであり、進んでそれは更に資本主義社會に新なる繁榮を約束する前導をするものだと考へる。三一年の金融恐慌からこの種の論者の聲は一層大きくなつた。カッセル、ホートレイ、ケーンズ等々が其の先頭に立つてゐることは云ふを待たない。

カッセルの意見は其の中でも最も徹底してゐる。彼の最近著「世界金本位制度の危機」（The crisis in the world monetary system, being the Rhodes memorial lectures delivered in Trinity term. 1932.）には、金本制の性質の變動、金本位制の世界恐慌との關係、金本位制改造の意見が簡單に說明されてゐる。それは又見樣によつては、「一九一四年以後の貨幣及び外國爲替」「國際聯盟委員會報告書」及び過般エコノミスト（昭和・一二・一五）に紹介された「金準備を論ず」を系統的に綜合したものであるとも見られる。以下其の內容の概略を窺つて見やう。

彼は先づ「金本位の性質の諸變化」に於いて、金本位の史的發展を簡單に省察して「金本位制度の性質の基本的諸變化は、今や我々をして此制度が自動的に作用してゐると考へられた事情より、愼重なる統制に服すべき事情へと移らしめた。」（p. 27）と述べてゐる。起源的に見ると、金本位は純然たる鑄貨と考へられ、自由鑄造・溶解とが保證され、無限の支拂手段たるものであつた。而してこゝに於いてのみ其の流通上の原則は所謂自動的調節によつて與へられた。然して、世界の大部分の諸國が金本位を採用したけれども、而も金準備なき紙幣を使用し、金に對する全需要を減少したからして、物價を著しく低下することなくして世界の貨幣制度を金の上に置き得たのである。この事實の中に、金價値に對する貨幣政策の勢力の漸次的興隆の端緒が見られる。（p. 2-3）この勢力を助長したものは各國の法定最低準備制度であつて、この制度の許に中央銀行は法定最低額以上のものを持つことによつて初めて、發行權を完全に行使し得る。されば、法定準備金が紙幣の現實的流通量を決定してゐるのではなくして、中央銀行の貨幣政策に基付く割引率に依存してゐる。そして、この場合貨幣政策の基本原理は何かと謂ふに、通貨の金平價維持であつて、準備金の意義は、兌換を通して其の金平價を維持することを保證する所の比較的從屬的な重要性を維持するに過ぬものであり、金本位維持に對しては、單なる一手段たるものである。このことは、國民的通貨は今や紙幣・預金通貨以外のものでないことを理解することによつて明瞭となる。故に「監理通貨」の如きは今日に初つたことではない。又「金塊本位」とか「金爲替本位」と云ふ名稱もスラングに外ならぬ。扨て金本位に上述の樣な根本的變化が生した結果、金本位制の發展は、世界各國が、其の眞意義を理解し、協同的に統制することに懸かつてゐるに拘らず、金は、各國の純然たる慣習的觀念や獨斷的法制の影響を眞ともに受けなければならなかつた。金準備は前述の樣に紙幣兌換の保證であり、金平價維持の一手段であつたに拘らず、過つた價値觀念上から來

つた迷信からして、半神祕的意義が附與せられ、今や手段は目的と化し、金本位即ち通貨の金平價維持と謂ふ眞の目的は背後に沒却された。大戰は、斯くの如き迷信を多少とも打破し、通貨の價値はその流通數量の稀少性に依存することを世に敎へたのである。(p. 10)然るに大戰後に於ける貨幣制度上に來し來つた變動は、寧ろ特奇なものであつた。即ち、北米合衆國は一九二一年のデフレーションを通して、金價値を戰前の六七%に迄引上げ（其以前は四〇%だつた。）以後約七年間これを維持したが爲めに、この點に、新金價値は一定の安定を示すことゝなり、金本位の複活を希望する他の諸國は何れも、其の物價水準を米國と一定の比率を保つ樣に强制された。北米合衆國のこの安定は彼には非常な意義あることである。何故なら、こゝでは、支拂手段の供給は全然金の供給とは獨立に統制され從つて、金の價値が、かく如く決定された弗の價値に服從してゐるからである。金の價値の自然的決定は、所謂自働的調節の行はれる自由金市場の成立を前提としてのみ可能である。然るに今やそして今後永久に自由金市場の出現は望まれないからして「將來の金本位制は、常に愼重なる〔統制的〕影響に從ふ所の本位即ち「統制」或は「管理」された本位でなければならぬ。」(p. 16) それではどう云ふ風に管理すべきであるか。金本位であるが爲めにはあくまで、通貨を金平價に於いて維持することが其の主要目的である。從つて、ここでは、金價値の安定を第一の統制目標とすべきである。所が彼の所謂「三%說」——金價値を維持する爲には、年々の事業量の增加と一致する樣に年々の金供給增加額は、金既存量の三%なることを必要とする——に對して現在の增加量は遙に抵い。だから、若し、供給の不足して行くだけ需要を減少して行く努力が拂はれねば「金本位のパラドックス」を直ちに現實する。それには各國の中央銀行が協調して徹底的に貨幣用の金の節約を・そして不當なる金の僞在を解き放して有効なる供給と化するの外はない。——工業用の金需要や東洋及び印度に於ける需要を制限し得ないから。彼がブラッセル會議やジェネバ會議で反覆縷說してゐるのはこの一事に過きないのだが、そして簡易明瞭なのだが、この事が各國の當局者の間に徹底しなかつたことは遺憾至極だとしてゐる。そして「現在の激烈なる恐慌は、基礎的に、主要國に於ける貨幣政策が、この提案に乖離し、其の不可避的結果に一顧も與へなかつた事實によつて齎された。」(p. 23) と。所謂金本位のパラドックスの現はれである。そして彼は、現在の恐慌が貨幣政策の缺陷からして生じ來つた狀態を說述し、又恐慌の發展が後者によつて如何に制約せれてゐるかを見る前に、恐慌の原因を貨幣政策上の缺陷に求めたことの理論的根據を第二章「現恐慌の分析」に於いて示す。

恐慌の分析に當つて彼は所謂景氣循環論による說明方法を第一に排斥する。これは、一定の周期的回歸性を數字的平均からして樹立して、理論の根本に置いてゐるのであつて、それからして、現實的發展の構成原因更に又現在の曲線の蓋然的持續性等に就いて倒底信據し得る結論を引出し得ないとする。それでは彼自身は如何にと謂へば、先づ「均齊的發展」として意味せられるものに就いて明瞭な觀念を得ることが必要だとする。「均齊的發展」、それは前に略記した彼の三%說に外ならない。彼はこの說は最近紐育準備銀行のスナイダー氏によつて數字的證明の與へられたことを誇示してゐる。三%說に就いてはここでは立到つた說明をする必要がない。——これに就いての詳しい最近の說明は國際聯盟會委員會の中間報告Interim Report of the Gold Delegation of the Financial Committee-Geneva. 1930. の附錄に、敎授の「金の供給」に關する研究報告中に述べられてゐる。——動態經濟學の目的は、この均齊的發展上に波狀的に直した特殊の變動の態樣及び其の他の諸原因を探求することにある。均齊的發展は理論的觀念であつて、唯に演繹的方法によつてのみ取扱はれる。これに反して、これよりの變倚をなしてゐる現實的發展は純粹理論を離れ、歸納的方法によつてのみ取扱はれる。而してこの均齊的發展の意味する所は、「消費は生產と

同じき速度を以つて增加し、新規實質資本の節約と創造も同樣であることであつて、」(p. 57)それは、現實的發展が正常なる發展を示してゐるか否かの標準たるものである。均齊的發展は、スナイダー氏に從つて大戰の爲め一時挫折せられたがそれは約八年間に亙つて遲延せられたに止つて、一九二二年以降一九二九年迄は其の正しい方向をもつて進み、同年に於いて再び折斷せられてゐる。されば現下の世界恐慌は一九二九年以後に於いて何ごとかが起り、それが恐慌を齎したのである。それ以前に恐慌の原因が働いてゐたとは謂へない。何故なら、それ以前は均齊的發展の時期だつたから！一九二九年以降「經濟的發展上の最も特徵的な形態は……物價の異常なる低落なることは疑ふ餘地がない。」(p. 54) 物價の一般的水準の問題は飽く迄純然なる貨幣上の問題であり、從つて、貨幣的性質を持つた說明によつてのみ上述の樣な變化は簡明になし得る。「純經濟的要因は相對價格を變化することは出來るが絕對的な一般的物價の高さは、これによつては決定されない。」(p. 54) これが爲めに彼は、過剩生產說と、過剩擴張說とを排擊してゐる。一九二五年の英國及其の他の諸國に於ける金本位停止後に於ける產業活動の活況は毫も異常なものではなくして、所謂正常的發展であつて、この點よりして、過剩生產說は成り立たない。次に米國に於いて特異な勢力を占めてゐる過剩擴張說即ち、二〇年代の米國經濟生活の驚くべき發展は、大體に於いて同國の信用機構のインフレーションの結果であつて、銀行預金の增大がこれを示してゐるとし、同期中米資の輸出によつて齎された外國の繁榮も同樣に人爲的信用膨脹に依存してゐるものであつて、何等確固たるものではなく早晚崩壞すべきものであつたとなす說を以つて、有害極りなき說であるとする。インフレーションの眞義は、支拂手段の增發による物價の高揚であるに拘らず、同期間中に於いては物價は、平準を維持してゐる。又銀行預金の增大は、世界的傾向であつて、個人の直接投資の危險と勞力を除去せんが爲めである。又、「この資本の輸出こそは實に頗る重大な性質を有する攪亂的要素によつて不斷に脅かされてゐた所の支拂殘額の均衡を維持する爲めの唯一の可能なる手段であつた。」(p. 60) 而して、彼の見地よりすれば必然的に物價水準に影響する貨幣政策上の缺陷がこの支拂殘額の均衡を維持すべき唯一の可能なる手段に對して、これを閉塞するが如き結果を生するに至つたことは、物價水準を急激に下降せしめた眞因であり、同時に、世界的恐慌を勃興せしめた原因でもある。要するに彼の見地よりすれば、世界恐慌は、其の經濟的發展の必然的結果ではなくして、世界經濟の活況從つて人類一般の幸福と安寧を齎すべき主要國の指導者等が其の責任に無理解であつたことが主要な原因であるに過ぎない。然らばそれ等の無責任は如何にして醸成せられ、金本位を崩壞せしむるに至つたか。

彼は戰後に於ける金の運動の時期を二分して一九二五年初めより一九二八年の前期とそれ以後今日迄を包含する後期とに分つ。前期は、賠償金の終局受領國たる佛蘭西及合衆國に於ける穩當なる貨幣政策によつて、換言すれば、前者の短期の資本輸出と、後者の長期資本輸出とによつて、兩國への巨額の金輸入額は相殺せられ、それは資本主義社會全般の繁榮を保持するものであつた。然るに一九二八年の終りから起つた事情は何かと謂ふに、一言にして謂へは金の偏在である。その原因は何か。兩國の貨幣政策が單に一國だけの經濟上の立場からして、或は、淺墓な國民的名譽心からして、金本位制の許に於ける常道を履踐することを忌避したことに存する。即ち「戰債の受領に際し、其の正當なる支拂形式である財貨を以つてせられることを欲しなかつたからして、世界の貨幣用金在高に對して不當なる需要を生ずるに至り、且つ、受領國は、其の蓄積した金を正常に〔譯者――インフレーションを生ぜしむる樣に〕用うることに失敗した。……これは一九二九年中頃よりの物價の異常なる下落及び其の後に生じた金本位制の崩壞した眞因である。」(p. 72) この立場からして、紐育聯邦準備銀行が紐育株式取引所に現はれた二八年

以來の投機の噪宴に對して消極的政策をとつたことを以て經濟過程のABCをも辯へない愚昧な政策だと冷笑する。合衆國の當時の金準備金に比すれば、破天荒なインフレーション政策によつて、投機を煽り、物價を吊上ぐべきが世界金本位維持の爲めの正道だつた！　佛蘭西に於いては、それは「國民的滿足や誇り」に結び付いて同じ様に金庫に死藏された。此等の諸國に於けるインフレーション政策の遂行を妨げた一大心理的原因は、經濟道德上許されない、淸教徒的デフレーション禮讃の傾向が民心に存することである。この二大國に於ける「非道に」(flagrant)貨幣機構が「誤用」されたが爲めに世界的物價下落・獨逸の崩壞的危機・英國の金本位制破棄及これへの大勢的順應が招來された。英國の金本位離脱を機として、他の過去數年來健全なる發展を示して來た諸國迄がこれに陸續として追隨したことは、「金本位は世界貨幣制度の基底として絶對に不完全なることを示すものであつて、……金價値の安定は愈〻無稽なる金獲得競爭の爲めに弱められ爲めに金は戰前に於ける如き安安せる價値標準として持つてゐたあらゆる特質をも失つた。」(p. 85)「一九三一年以來紙幣通貨は金通貨に比して遙に高度の安定性を示してゐる。そして何れ、世界は「磅貨は其の對內購買力の故に價値ある通貨となるに至り、更に英國に對する債務國の總てより、大なる磅貨需要が當然生し來る日を見るであらう。かくて磅貨は多分他の健全なる紙幣通貨とともに、弗との購買力平價を恢復するだらう。」(p. 87) 金本位國即ち米・佛に於けるインフレーション政策は物價水準を恐らくは紙幣本位國のそれに迄引上げ、其の結果は紙幣通貨の舊金平價への復歸となるにちがひない。」(p. 87) 斯くの如き發展は頗る健全ではあるが、紙幣本位制を再び金本位制へ乘り換へしめる危險をもつてゐる。人々の中には「爲替相場が舊水準に或は望ましいと考へられる水準に到達したならば直ちに金本位へ復歸することを信ずるものがあるが……これは皮相的見解だ。」(p. 88) 今や世界的金本位制度は、價値標準たる金の地位其のものとゝもに完全に破壞されたのであるからして、この制度の復活は、若し、金價値の合理的安定に對する何等かの保障的協約が各國間に諦結され効力を生ずるに至らなければ、完全に危險である。保險條項の第一は、各主要國間に於ける組織的金節約政策を確定する爲めの協同的行動のとらるべきこと。第二には、戰時債務の完全なる捧引き、第三は、國際的金本位は國際的市場を前提とする。されば世界は、近來幾に行はるゝ獨占關稅政策によつて各國を孤立せしめるごとき根本的に過つてゐる保護政策を放拋して、國際貿易上の自由を協定すること、第四は、現在の如き準備金に對する法定は、前述の様に何等の意義なき故にこれを完全に廢止し、主要銀行間の協定に代らしめること、これ等の諸希望條項は恐らく近い將來に於いて實現し得ないことは勿論である。されば、紙幣本位國は金本位離脱の眞意義を領解して、獨自的發展によつて鞏固なる地位を築くべきである。この際とらるべき目的は、一に、物價水準の最高可能なる安定、換言すれは、紙幣本位の貨物の名辭を以つてする購買力の安定を以つてすべきことである。一國の紙幣本位國は英國の主導の許に結合せられ、この一國內に於けるより自由なる貿易の樹立は、商業世界の主要部分に於ける經濟的復活を齎すことゝなり、金本位制への、復歸の期を早きに失せしむる如きことをなからしめるであらう。

然しながら著者には世界貨幣制度の前途は暗黑そのものとして映し來る。合衆國に於いて貨幣政策上の意見は區々に岐れてゐて、歸一する所なく、從つて、弗のみでなく、金の價値すらもが極度の不安定な狀態にある。佛蘭西に於いても何等一定の合理的貨幣的改造の計劃を認め得ないし、紙幣本位國は何れも、金本位離脱の眞意義を沒却し、國內の物價安定の代りに一意金準備金を豐富ならしめんことを希求し、紙幣通貨が宛も斯くの如き政策によつて確實にせしめられるが如くに考へてゐる。英國に於ける均等化基金や過般來の英蘭銀行の金の大量購入の如き其

の現はれに外ならない。

以上カッセルの所論を大體に亘つて紹介した。紙數の制限上これに對して批評的省察を加へ得ないけれども、唯、最も重要なる一點に於いて彼が基本的な過りを侵すものではないかと考へられたからして、其の點を指示するに止めやう。

それは、世界恐慌の分析を行ふべき基低的方法に關するものである。彼が、世界恐慌の原因は一九二八年末二九年以降に生じた純然たる貨幣上の運動であるとするその命題の理論的根據はどこにあるかと謂へば、それは究極する所彼の三%說から來てゐる。一八五〇——一九一〇年の數學的平均的發展率は三%（60√5,2=1.0279）だつた。戰爭の爲めこの發展率は埋沒された。そして、戰後の二二——二八年迄は三%だつたが故に正常な發展であつた。この時代は世界經濟が總て均齊的に發展した。故に二九年以後に起つた事實が其の源である。斯う云ふ演繹の方法は許されるか。彼自身恐慌の分析に「事業循環論」の方法によることを排擊する。何故か。それは曲線の形を以つてゐる數學的表現からは、現實的發展の構成的原因は把持出來ないし、「現實の曲線の蓋然的持續に就いては殊更に出來ないからだ。」（p. 33）彼の求めた長期曲線の場合には、これを實現に引延ばして來ても差支ないのであるか。三〇%の發達率を持つた傾向線は總ての變倚を平均して出來上つてゐる平均線である。であるから、現實に生じて來た總ての變倚を考慮して始めて、平均的發達——若しそれが認められるとすれば——と合致してゐるかどうかを見るべきである。戰爭及び其の後の一時の期間を慮外して置いて、其の後の數年間の發展——戰爭による生產機關の尨大なる破壞後に來つた——がよし三%を示してゐても、それを移して直ちに、正常なる發展だと、公式に當てることは、餘りにも亂暴な演繹であり、經濟法則の永久化への育信ではあるまいか。

最近經濟文獻

〔理論經濟學〕

*マルクス主義經濟學　コムアカデミー・レーニングラード支部經濟學研究所編纂　コフマン監輯　廣島定吉　直井直夫　西雅雄譯、第一卷、菊判四二二頁　叢文閣

*レーニン經濟學教程　アドラッキー編　河野重弘譯　四六判五三四頁　共生閣

*經濟原論　チャップマン著、犬丸秀雄譯、四六判二五六頁：……寶文館

*理論經濟學講義（第一册）　松浦要著　菊判一六〇頁……巖松堂

*經濟學說研究　吉田秀夫著　菊判三九二頁　第百書房

時差說覺書（經濟論叢、三五卷、三號、昭和七・九、二四—四二頁）　高田保馬

利子步合の理論（經濟論叢、三五卷、四號、昭和七・一〇、二二—四三頁）　高田保馬

總體經濟と個別經濟（下）（經濟論叢、三五卷、三號、昭和七・九、一〇一—一一〇頁）　大塚一郎

高田博士の蓄積理論の一考察（大原社會問題研究所雜誌、九卷二號、昭和七・一〇、一—二一頁）　久留間鮫造

インフレーションに關する基礎理論に就いて（大原社會問題研究所雜誌、九卷、二號、昭和七・一〇、九九—一五九頁）……笠信太郎

河本氏の地代論（大原社會問題研究所雜誌、九卷、二號、昭和七・一〇、一六一—一八八頁）　櫛田民藏

經濟行爲と衝動との關係（經濟志林、六卷、二號、昭和七・九、一—一九頁）　高木友三郎

經濟周期の一要因としての過小消費（世界の勞働、九卷、一〇號、昭和七・一〇、一—一三頁）

シュムペーターの貨幣本質觀と貨幣數量說（二・完）（內外研究、五卷、三號、昭和七・九、一—四〇頁）　岡橋保

*Akerman, J.: Ökonomischer Fortschritt und ökonomische Krisen. Wien. 1932. IV, 137 S.

*Bente, E.: Die Selbstzersetzung der kapitalistischen Produktionsordnung bei Karl Marx. Köln. 1930. VII, 94 S.

*Brenninkmeyer, L.: Neue Zinstheorien in der deutschsprachigen Literatur seit Böhm-Bawerk. Köln. 1932. VIII, 105 S.

*Die Güterverteilung in der Gesamtwirtschaft. 3 Vorträge: Oswald v. Nell-Breuning: Die Güterverteilung in d. Wirtschaft.—Othmar Spann: Die Güterverteilung in d. berufsständ. Wirtschaft.—Emil Lederer: Die Güterverteilung als Problem d. Sozialismus. Berlin. 1932. 87 S.